

* 小平さんをドイツに発見

PMCを国立天文台博物館にするため、古い観測器械や測定器械などを収集し収蔵展示を進めている。その中に元国立天文台長小平桂一氏の研究成果をモデル化した「銀河団模型」(写真1)がある。これは、アーカイブ室新聞66号で紹介した毎日新聞全国版1面に大きく紹介された「銀河団の定量分析」による成果を共同研究者であった大学院生たちが手作りで製作した模型である。

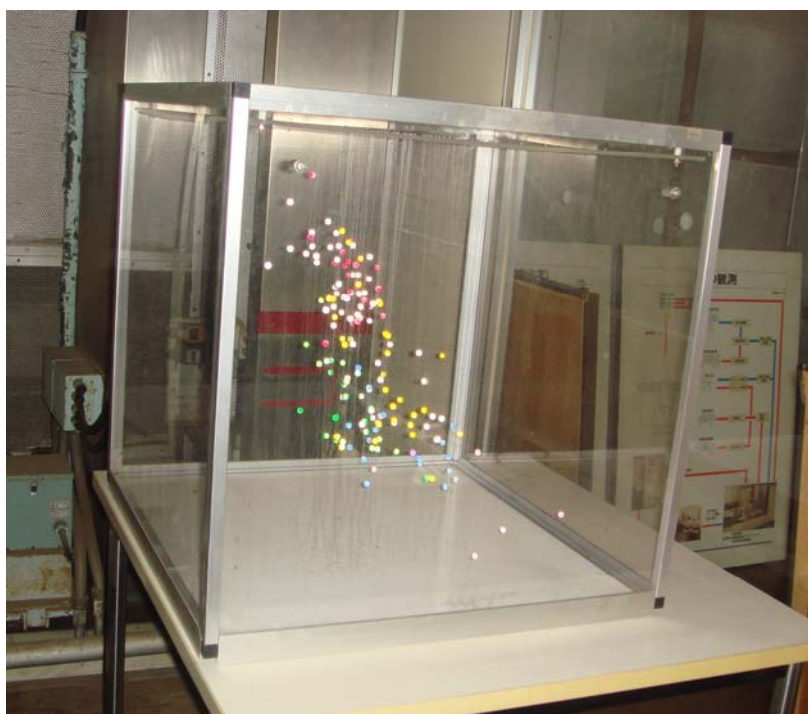


写真1 小平さんの銀河団模型

このたび、10月25日の国立天文台の特別公開に当たり、小平さんに、この模型の解説文をお願いしていたところ、ドイツから下記の「解説文」をいただいた。

「1980年代に科学研究費補助金に新設された「特別推進研究」の最初の天文分野の研究課題として「銀河の定量分類」が採用され、木曾観測所のシュミット望遠鏡で撮影した約1000個の銀河の表面輝度分布を定量的に測定し、銀河の骨格を代表する数値指標を研究分析しました。その結果、世界に先駆けて、それまでの形態分類に代わる定量分類を導入することに成功しました。この模型は初期の部分的な測定結果を基に、横軸に銀河半径と平均輝度、縦軸に稠密度をとって個々の銀河の位置を楕円型、円盤型、渦巻き型などの形態別に色を変えて示したもので、いろいろな銀河がほぼ平面に近い二次元面上に系列を作って分布することを示唆しています。1980年代中頃の東大5月祭に研究成果紹介の一環とし

て出展するために、渡辺正明さんを中心に大学院生達が自力で作成したものです。縦糸の張り方に工夫が見られます。（小平桂一）」

小平さんは、「すばる」望遠鏡の建設に尽力され、1994年4月から国立天文台長を6年勤めた後、総合研究大学院大学学長を6年間勤められ、2008年3月に退かれていた。その後の消息は知る人は知っていたであろうが、すばる計画推進時の側近であった筆者も現在の所在を知らなかったが、今回のこの依頼への返事で、「日本学術振興会のボン・センター」に常勤でお勤めである事が分かった。